

東西分流の真相

地元の門徒から本徳寺が東西にわかれた経緯をたずねられることが多い。当然、本願寺の東西分流とリンクしていることは明らかである。東西分流の経緯は史料によっていろいろな推測がされてきた。ここで、諸説を照合し、妥当な東西分流の経緯をつまびらかにしておく。

戦国時代、本願寺は石山(後の大阪城)に本拠を構え、日本における最大の民間勢力として、しかもネットワーク化した商圏を背景に存在していた。信長・秀吉との石山戦争によってこの勢力は解体され、本山・本願寺は京都に、本徳寺は亀山に移される。この時点では、本願寺も本徳寺も一つである。

石山戦争終盤、時の法主・顕如は平和的講和に傾き、



船場御坊本徳寺・本堂

船場本徳寺は1618年本多忠政の尽力により教如派(東派)・本徳寺として創建される。宝永の大地震で本堂が損壊、1718年に海澄連枝の時、榊原政邦の外護により新本堂が建立された。17間四面の壮大な本堂で幾多の火災や震災、戦災を免れ今に到っている。

市指定文化財



宗祖真向等身御影(亀山御坊内陣・右脇壇) 1590年代から本願寺の行事刷新に際し、天下一統の理想を掲げた。この御影は、1609年に本願寺の御影を安置した。1612年に本願寺の御影を安置した。1612年に本願寺の御影を安置した。

その長子・教如は徹底抗戦を意図した。所謂、ハト派とタカ派である。播州の真宗は教如派の強い地域でもあったが、本山・本願寺において、顕如の没後、教如が法統を継承するが、時の天下人・秀吉にとつてタカ派のリーダの起用はおもしろくない。秀吉は、生母如春尼による三男・准如への譲り状の露見を幸に、トップを准如にすげ替えた。

この時以来、教如は引退を余儀なくされ裏派として雄伏する。准如は京都本願寺を引き継ぎ、公に表派を標榜することになった。これが今に続く西本願寺(浄土真宗本願寺派本願寺)である。

教如派は、その後、巻き返しを図り、関ヶ原以降、家康との接触を深め、烏丸七条に教如派の本寺開設に漕ぎ着ける。今に到る東本願寺(真宗大谷派)の誕生である。このように稀代の為政者・家康は教団内部の対立をうまく利用しながら、東西分断をもって本願寺の潜在的脅威を軽減することに成功した訳である。

中央の分断騒動は、地方にも大きな混乱を与えた。播州では、亀山本徳寺の住持は教如派の教専が継承していたが、後継問題で教如と対立し表派帰属の意向を鮮明にした。教如からの池田輝政への働きかけも失敗し、教如と池田輝政との対立は決定的となった。このようにして、播州の真宗勢力は准如派に移

行することになった。亀山本徳寺内陣・右脇壇には、この時准如より下附された親鸞聖人真向等身御影(大谷本願寺親鸞聖人御影)が安置されている。

池田氏転譜後、本多忠政の入譜により、播州教如派の家臣団にとって再興の好機が訪れた。忠政の意向もはたらき、旧池田家屋敷を寄進して、船場本徳寺つまり東派の本徳寺を再興させることになった。亀山本徳寺の山号が「霊亀山」であるに対して船場本徳寺は「轉亀山」という。もともと真宗の寺に山号はどうかと思うが、「轉亀山」の由来には教如派の思いがこめられているようだ。

静かに息づく念仏道場

さて、このような歴史的経験を刻み込んだ事物の集合を文化遺産と言うらしい。文化遺産は単なる過去の秘話を封印してあるのではなく、歴史的価値を今に発散しつつある。歴史的価値には二つある。その一つは静止的価値で、好古的・美術的・史料的な「もの」そのものが価値をもつ。他方、動的な価値がある。これらは「もの」そのものではなく「もの」を媒介にして發揮する価値である。従って「もの」は置き換えられていく。

たとえば、真宗のご本尊などは、名号から絵像に、絵像から木像に変遷してきたが、その時代時代にお念仏の真価を發揮してきた。お寺の土地や建物、境内や植生などは、時代的な変化を通して信仰を体感できる空間を創出する。

一般にお寺の建立や整備は、長い時間をかけて地域の門徒の懇念で建てられる。このように特殊な地域的事務をもって、地域のシンボルとなる。

世人は、本徳寺の境内に一步足を踏み入れるや、近代の喧噪とはかけ離れた、静かな落ち着きと深い安らぎを感じると言う。それはまさに色々な要素が組み合わされた歴史的価値に触れているからである。この価値はお寺を支える多くの人によって次代に受け継がれる。